

# 報 館

平成 27 年 5 月 1 日発行 第 32 号

アメリカ人少年が見た昭和の目黒

## 半世紀前の久米邸内外

国際企業弁護士上智大学法学部教授 スティーブ・ギブンス

久米美術館では、久米邦武・桂一郎父子が愛した「目黒」の地域性について継続的に研究し、「久米邦武の『書齋』展」(2003)などの場で発表してきた。折しも2015年は目黒駅開業130周年や再開発など地域への関心が高まっており、当館でも「書齋展」リバイバルを念頭に情報収集にとめていたところ、昭和30年代後半に目黒駅周辺でよく知られたアメリカ人の少年がおり、久米家とも親しい関係であることがわかった。その少年ことギブンス氏に当時の思い出をお寄せいただいた。

東京オリンピック直前の1964年から1964年の間、当時小学生だった私はアメリカ大使館に勤めていた父、母、妹3人、犬1頭と一緒に、久米邸の敷地内にあった家に住んでいた。昨年60歳になった私は現在白金台に妻と子供3人、犬3頭と一緒に暮らし、しばしば目黒駅周辺を訪れる。久米美術館のある久米ビルの前を通る度に50年(半世紀!)前の目黒の風景が臉の裏に浮かんでくる。そのときの目黒の風景は消えてしまい、地下に眠っている。

久米邸の敷地には芝生があり、木が多く植えられていて、子供にとっては木登り、隠れんぼ、雪遊びに最高、まるで緑の島だった。私たちが暮らしていた木造家屋の玄関から上がると広い居間があ



り、縁側から裏庭が見えた。奥に台所、そして畳の「テレビルーム」もあった。小さい白黒テレビでその当時の人気番組「少年探偵団」、「ローハイッド」、「ザ・ヒット・パレード」を見た。ケネディ大統領の葬式、大鵬と若乃花の対戦もそこで目撃した。

久米美術館の現館長久米邦貞さんのお母様の存在は大きかった。日常的に和服をお召しになり、洋服姿は私の記憶にはない。そのときの高度経済成長時代以前のもっと地味な、品格のある世代を代表する、ちょっと怖い方だと感じていた。しかし、久米邸の敷地で乱暴に遊んでいる外国人の子供たちに優しくかった。邦貞さんの奥様の妹さんをピアノの先生として紹介していただき、「テレビルーム」にあったピアノで手ほどきを受けた。(残念ながら私はあまりよい生徒ではなかつ

たようだが。)

この緑の島は活気溢れる商店街、飲食街に囲まれていた。北側には山手線緑路沿い三田通りの商店街、東側には権之助坂の商店街の後ろ姿が並んでいた。夜になつたら、居酒屋、呑み屋から流れる音楽や笑い声家がにいても聞こえた。夏になつたら、敷地のへりの木の陰に隠れ、権之助坂の店の裏窓から店主の家族の夕食風景が垣間見えた。

目黒に移る前、3歳の時に来日し二子玉川に数年住んでいた。そこで近所の子供たちと毎日多摩川土手で遊び、自然に日本語をしゃべれるようになっていた。そのため目黒に移り住んでも、毎日学校から家に戻つたらすぐに制服から普段着に着替え、物怖じすることなく目黒界隈の探検に出かけた。

敷地の門を出ると狭い砂利の路地があり、数十メートル行くと突き当たりが三田通りだった。三田通りに向かって左側にライオン座映画館があった。振り返ってみると、その当時の目黒は今とは違



久米邸内にて、少年時代の筆者

「有楽町」風の雰囲気を感じていた。パチンコ店、スナック、子供によくわからない風俗店が沢山あった。朝の道には前の夜に出たごみが散らかっていた。狭い路地の片側に現在の久米ビルの前身が建った。当時「名店街ビル」という名前で知られ、和菓子屋、八百屋、せんべい屋など、色々な店が中に並んでいた。名店街の店員とすぐ仲良くなり、可愛がってもらい、たい焼き、あずきアイス、みかんなどを食べさせてもらった。

現在、久米ビルを背にすると、三田通りの向こう側はすぐ山手線の線路で駅のホームが見える。しかしその当時通りの向こう側には氷屋、うどん屋（かけうどん一杯30円）、洋菓子屋、喫茶店（ドアの取手が裸の人魚の形だったことは記憶に残る）など店が立ち並び、三田通りはその分狭く、車、バス、歩行者で溢れていた。氷屋さんに氷を鋸で引き切る技を教えてもらい、氷の配達についていった。「名店街ビル」から目黒通り方面に進



むと、斜めに権之助坂まで通り抜けられる狭い通路の入り口があった。アーケード風の屋根を被ったこの通路に、タバコ屋、雑貨屋、八百屋、肉屋そして魚屋が並んでいた。

8歳の少年には「ももや」という魚屋は刺激的な別世界だった。まぶしい電球の下、鉢巻、黒いゴムエプロン、長靴姿の男たちが4、5人大声で「らっしやい！らっしやい！らっしやい！」と叫んでいた。銀色の魚が氷の上で光を放っていた。店の裏ではもう2人の店員が魚をおろしていた。

天井から竹かごがぶら下がっていた。このかごは店のレジだった。店員はお客様さんから受けたお金をかごに入れ、おつりをかごから出した。

店主は野口茂之さん、プロボクサーを経て、亡くなったお父さんから商売を引き継いだ当時28歳の若者だった。皆に「しげちゃん」と呼ばれていた。



(上)名店街ビルにて筆者の妹と  
(下)三田通りの商店街  
現在の目黒駅西口付近から恵比寿方向をのぞむ  
しなかわWEB写真館(品川区)提供

## 関係文獻

「ももや」は新しい駅ビルに移っていた。しげちゃんと話をしようとしたら、日本語、英語と手まねのちゃんぽんしかできなかつた。しげちゃんにとって可愛い少年が可愛くない大学生に化けてしまったこともあまり嬉しくなかつたはずだが、また「ももや」でアルバイトをさせてもらった。10年前の少年を覚えていてくれたお客さんもいた。

しげちゃんと再会したのに昔と同じように上手くコミュニケーションをとれなかつたことは悔しかった。それをきっかけにアメリカの大学で正式に日本語の授業を受けた。幸いに子供のときの日本語は脳のハードディスクから完全に削除されていなかった。

50年後の今、旧久米邸の所在地から歩ける距離に居ることは偶然ではないだろう。職場がアメリカ大使公邸を見下ろすビルにあることも偶然ではないだろう。50年前の父親と同じルートを同じように自転車通勤していることも偶然でないだろう。鮭と同様に、記憶の源流に戻る本能が働いたのだろう。

来年そのルートにあるホテルオークラも消える。しかし私が「ももや」の包丁でつけた左手の傷跡は今でもまだはっきりと残っている。

- ・久米邦武関係
  - ・吉田忠「江戸の好奇心を刺激し続けた『科学技術』中国経由の西洋知識と蘭学」『Back Up』No.33、金沢工業大学、3月1日
  - ・週刊新発見！日本の歴史37 近代2 維新政府 文明国への道
  - ・朝日新聞出版、3月23日
  - ・沢渡重蔵「岩倉使節団が見たスイス。」『IMPRESSION GOLD』3・4月号、アメリカン・エクスプレス・インターナショナル Inc.、3月30日
  - ・山田顕義と近代日本
    - ・秋博物館、4月19日
    - ・岩倉具視の能業再興を支えた人物（フレーン）久米邦武と能楽展資料集
    - ・久米美術館、4月20日
    - ・鍋島直正公（鍋島報効会、9月14日）
    - ・夢チャレンジ きらり山口人物伝 Vol.7
      - ・山口県ひとつくり財団、9月30日
      - ・大閑展
      - ・佐賀城本丸歴史館、10月4日
      - ・品川から世界へ サムライ海を渡る 幕末明治の日本と外交使節団
      - ・品川区立品川歴史館、10月12日
      - ・高階秀爾・芳賀徹・老川慶喜・高木博志 編著『鉄道がつくった日本の近代』(成山堂書店、11月28日)
      - ・福川知子「久米邦武が『米欧回覧実記』で活用した地理書(その7スベイン)・

ある日店主に「鉢巻をしてみるかい」と言われた。「うん」と答えたら、鉢巻だけではなく、絆纏、エプロン、長靴を着せてくれた。

「恰好いいぞ。鯡のワタ抜きして見るかい？」

「うん。鯡をギザギザ下手におろした。店員は新しい同僚を見て、たばこを吸いながら笑った。恥ずかしかった。もつと上手になりたかった。楽しかった。

「また明日来るかい？」

「うん。」

その後、アメリカに帰るまで、毎日学校が終わったらすぐ「ももや」に行つて、半纏と長靴に着替え、「らっしやい！らっしやい！らっしやい！」と声を張り上げ



魚市場にて、鉢巻姿の筆者

た。土曜日の朝には目覚まし時計をつけて早起きし、しげちゃんと一緒に築地の市場に行つて、前日の竹かごのお金を元手に、その日の商品を買った。毎日閉店の時間になったら、しげちゃんは竹かごから100円玉をとって、その日の「給与」を渡してくれた。店員たちと一緒にサバの塩焼きとごはんを立ったまま食べて、夕食を済ました。「ももや」で過ごした時間があまりにも楽しく、段々と自分の家に帰ることが嫌になったほどだった。しかし10歳の誕生日を迎えた頃のある日、母親に「話がある」と言われた。父親の仕事の都合で家族がアメリカに戻ることに決まったという話だった。

しげちゃんに再会したのはおよそ10年経った後だった。その間完全に英語だけの環境に暮らし、日本語が口から出なくなっていた。大学の夏休みに目黒に戻ったら、久米邸の「緑の島」が消えていた。

- ・ポルトガル編(『地質学史懇話会会報』第43号、地質学史懇話会、11月30日)
- ・尾崎葉子「一枚の写真が語る史実 ―もう一つの李參平墓碑―」(『季刊皿山』No.104、有田町歴史民俗資料館、12月1日)
- ・三好信浩「佐賀偉人伝10 納富介次郎」(『佐賀城本丸歴史館』13年10月30日)

### 久米桂一郎関係

- ・洋画家たちの青春―白馬会から光風会へ(中日新聞社、3月21日)
- ・宮川匡司「美術史の隙間埋める『洋画家たちの青春』展」(日本経済新聞「文化」欄、4月2日)
- ・『光風会史―100回記念』(光風会、4月16日)
- ・『おいしいアート食と美術の出会い』(横須賀美術館、9月)
- ・植野健造「新出資料紹介『第八回白馬会展覧会出品目録』」
- ・『美術研究』413号、便利堂、10月24日)
- ・東京美術倶楽部編『日本の20世紀芸術』(平凡社、11月15日)
- ・Fumiko Ito, "Un peintre japonais à Brehat, Kunté Keichinô, et autres peintres japonais qui ont visité la Bretagne", *Territoires du Japonisme*, Presses Universitaires de Rennes, 2014

### 美術館紹介その他

- ・『TOKYO美術館 2014-2015』(柘出版社、2月28日)

- ・品川区大田区のミュージアム35(品川大田地域観光まちづくり推進協議会、3月)
- ・『東京人』2015年1月増刊号(都市出版、15年1月13日)
- ・寺崎武男展紹介『パンフレット『品川区民芸術2014』、8月房日新聞、10月10日世界日報、10月11日EDP:日伊協会、10、11月『月刊ビューポイント』12月号世界日報月刊ビューポイント編集部、11月20日』『週刊新潮』10月9日号(新潮社、10月9日)
- ・東京藝術大学 平成二十五年度 久米桂一郎奨学金受給者
  - 美術学部油画専攻 一年 黒坂 祐
  - 一年 平本 恵理
  - 一年 楊 博
  - 一年 田沼可奈子
  - 三年 鈴木 弦人
  - 三年 矢田 遊也
  - 三年 榎田進之介

## 作品貸出

- ・「パテックフィリップ展」歴史の中のタイムピース（明治神宮外苑聖徳記念絵画館、1月16日～1月19日）に久米邦武『米欧回覧実記』手稿1点及び刊本2点
- ・「洋画家たちの青春―白馬会から光風会へ」展（東京ステーションギャラリー、3月21日～5月6日・松坂屋美術館、6月14日～7月6日巡回）に久米桂一郎「林檎拾い」
- ・「おいしいアート 食と美術の出会い」展（横須賀美術館、9月13日～11月3日）に久米桂一郎「林檎拾い」

2014年は日本スイス国交150周年記念にあたり、記念事業の「パテックフィリップ展」「スイスデザイン展」に当館所蔵の岩倉使節団関連資料を出品した。どちらの企画においても、岩倉使節団のスイス公式訪問（明治6年）が今までの両国交流の原点となったことが紹介された。

\*「スイステザイン展」は2015年1月東京オペラシティギャラリーにて開催され、7月以降静岡県立美術館、札幌芸術の森美術館に巡回する。



「スイステザイン展」チラシ

## 久米桂一郎の教え子 vol.17 石塚三郎

- 1907年(明治40) 福井県に生まれる  
 1931年(昭和6) 第12回帝展に初入選  
 1933年(昭和8) 東京美術学校西洋画科卒業  
 1935年(昭和10) 第二部会展に入選  
 1940年(昭和15) 創元会創立と同時に出品、入選  
 1945年(昭和20) 創元会会員となる  
 1947年(昭和22) 創元会運営委員となる  
 第3回日展に入選、以後20回入選  
 1972年(昭和47) 渡欧。渡欧展開催  
 1976年(昭和51) 創元会常任委員となる  
 1980年(昭和55) 画業50年記念展開催  
 1991年(平成3) 逝去



「奥越の春」油彩、カンヴァス 1978

## 新商品「久米邦武能楽資料集」 「能楽クリアファイル」発売

特別展「久米邦武と能楽」(2013)の内容をベースとした資料集を販売中。資料集は、久米家に伝わる扇(「三番叟」が描かれている)をモチーフとした、華やかなプリントのクリアファイルに納められている。



「久米邦武と能楽」資料集 ¥800  
クリアファイル 単品 ¥200

## 一年のうごき

平成26年

- ・久米桂一郎・黒田清輝と東京美術学校の教え子たち展 (1月8日～2月9日)
- ・久米美術館 常設展Ⅰ (2月18日～3月23日)
- ・久米美術館 常設展Ⅱ (4月2日～6月12日)
- ・久米美術館 夏の常設展Ⅰ (6月21日～7月27日)
- ・久米美術館 夏の常設展Ⅱ (8月6日～9月15日)
- ・寺崎武男―心の故郷イタリヤ展 (10月2日～11月16日)
- ・久米美術館 常設展Ⅰ (11月26日～12月21日)

平成27年2月14日、当館参事・研究員の高田誠二先生(北海道大学名誉教授、日本計量史学会理事)が逝去されました(享年86歳)

計量工学がご専門の先生は、科学史の立場から『米欧回覧実記』や久米邦武の研究をされました。平成3年に北大を退官以降は当館研究員として定期的に出勤され、理化系の枠をこえて邦武の膨大な蔵書に取り組み白衣すがたの高田先生は、美術館関係者にとどまらず久米ビル周辺の人々から親しまれました。20年におよぶ当館在職中の主な業績として、「久米邦武文書2科学史関連」編集、特別展「西学の要は窮理」企画、「評伝久米邦武」(ミネルヴァ書房)執筆があげられます。健康上の理由から退職なさった後も、変わらず精力にご研究を続けておられるとうかがっていましたが、ご病状の急変とのことで突然の訃報に接しました。心よりご冥福をお祈り申し上げます



『評伝邦武』出版祝賀会にて(2008)

## 久米美術館館報 第32号

平成二十七年五月一日

編集発行人 久米邦貞